

北九州演劇祭 ～これまで、ここから～

高原 演劇祭が始まると聞いた時は、個人的に演劇好きなので嬉しかったけれど、記者としては賭けだと思いました。演劇祭以前は劇団をやっている仲間とうして観たり観られたりという感じでしたが、演劇祭となれば芝居をしてない人にも観に行きたいと思わせる舞台を創らなくてはならない。裏を返せば、下手な芝居を作れば芝居嫌いを生み出すことになるわけで、大変なことを始めたな

井生 第3回では、大衆演劇にも来てもらいましたね。ワークショップもお願いしたりして。当時はジャンルを広げるとい意味もあ

泊 クナワ方には、小倉城の前で「天守物語」をやってもらったり。本当のお城でやったのは北九州が唯一なんじゃないですかね。「天守物語」を野外で、しかもお城の前でやりたいという僕の突飛的な案が実現したんです(笑)。

井生 「演劇祭をやる」といのは、もとも北九州市の市制三十周年にあたって市が何か始めようという話から持ち上がったんです。私が北九州で何十年も劇団をやっているものから職員の方が相談に来られました。私としては演劇をやるのは大変なことですよ、と話したのですが、熱心な方でそれでも演劇祭をやりたいというので条件を出しました。一つは「過性のものではないこと」、二つ目は「市民主導でやること」。そうやって演劇祭は始まったんです。

高原 それでも2回目にして早くもひと皮むけてしまいます。発定したばかりの日本劇作家協会が第一回の劇作家大会を北九州演劇祭にあわせて開催することになって、別役実さんや斎藤憐さんら、現代日本演劇の大御所が北九州に集結したんです。これは、東京や大阪で演劇をやっている人たちが北九州を意識するようになったひとつのきっかけだったと思いますね。

高原 この演劇祭だから生まれた舞台もたくさんありました。小倉で子ども時代を過ごした演出家の宮城聰さんが劇団クナワウを率いて「女王メデア」を初演したのは99年、第7回のときで、今では海外でも公演されている作品ですからね。

―演劇祭も15回目、第1回から14年経つわけですが振り返るとどうですか？
泊 僕は演劇祭が始まる年に東京からリターンしてきたんですよ。演劇祭が始まって15年ということ、就職で一旦離れていた演劇生活の再スタートとなった年でもあるんです。あれから15年経ったんだなあと改めて思いますね。

あと思いました。
井生 だからこそ私は、市民主導でなければならぬと思つたんです。そうしないと続かない。今となると、そうできた結果として15年も続いているんだと思いますが。

高原 記録を見ると、第一回目からそうそうたる劇団やカンパニーが参加していますよね。ザ・ニナガワカンパニー、扉座、劇団青い鳥…。他にも大分、佐賀からも参加劇団がありました。



第2回北九州演劇祭と運動して日本劇作家協会の第1回大会となる「日本劇作家大会'94」が北九州国際会議場にて開催。多数の著名な劇作家たちによるシンポジウム、ワークショップが開かれた。
片岡長次郎一座 北九州版「北向きの虎」より。参加型芝居づくり「片岡演劇道場」と題したワークショップでは、台本なしの口立を体験。



北九州演劇祭

～これまで、ここから～

今年で15回目を迎える「北九州演劇祭」。この14年間、北九州演劇祭は北九州という街にとってどんな存在だったのか、この土地の演劇界にどんな影響をもたらしたのか。北九州の演劇を牽引し続ける劇団青春座・代表、井生定巳さん、今まさに第一線で活躍する飛ぶ劇場・代表、泊篤志さん、そして立ち上げから現在まで演劇祭を見守り続けている毎日新聞記者の高原克行さんの3人に、これまでの14年間について、そしてこれからの北九州演劇祭について語っていただきました。

進行・文:筒井亜耶(シアタービュー-フクオカ)
写真・資料提供:北九州演劇祭事務局

- 井生定巳◎いおうさだみ : 45年創立、北九州を拠点に60年以上の歴史を持ち、演劇祭の市民参加公演や小劇場での実験的な作品発表など、精神的に活動を続けている劇団、青春座の代表。若手の活動にも熱い眼差しを注ぐ。
- 高原克行◎たかはらかつゆき : 毎日新聞西部本社事業部長。学芸記者として演劇祭創成期以前から北九州、福岡の演劇界で、土壌を温かく、ときに厳しく見守り、育ててきた人のひとり。
- 泊篤志◎とまりあつし : 劇作家、演出家。北九州から全国区での知名度を持つ劇団、飛ぶ劇場代表。北九州芸術劇場で、場芸ディレクターとして、九州の代表的劇団の一員として、後進の育成にも力を入れている。

